

環境学習による心の構造と機能の文化的進化

木俣美樹男（自然文化誌研究会／植物と人々の博物館）

キーワード：自然の三相、環境学習過程、心の構造と機能、認知流動性、文化的進化

自然には3つの相 phase がある（岩田慶治 1986、木俣美樹男 1992）。原初的な大自然、人工化された農山村や都市などの半自然および心の中の自然観、真の自然である。この3相をめぐる実践研究の整理から、環境学習過程の全体的枠組をまとめた。さらに、これをユング（1955）の曼荼羅による心象表現と万華鏡のイメージから、環境を学ぶための10の環境学習プログラムと6の環境教育の目標を統合した作業仮説として示した。自然誌(N)や文化誌(C)を学び、世界観(W)を形成する基本学習プログラム、これらをつなぐ生産(M)、思索(T)および感得(F)の連関学習プログラム、すべてを統合する遊戯(P)の統合学習プログラム、また加えるに、地域、協働および保全の行動学習プログラムによって構成した。

心の先史時代を辿り、ミズン（1996）は石器作りの技術的発達から心の構造の文化的進化について、幾つかの作業モデルを考察して、ホモ・サピエンスの心の構造に関して大聖堂をモデルとした統合的な仮説を提示した。また、スタウト（2005）はサイコパスの研究で、心の機能が五感、第6感（直感、直観）に加えて第7感（良心、教養）があることを提示し、ホモ・サピエンスはいまだに心の機能の第7感が未発達であるとした。心の構造と機能の文化的進化における未発達ないし退化は、自然から乖離し、生業を失い、認知流動性を低下させた結果、生涯における環境学習過程を実体験できなくなったことによるものとする。

1945年のトリニティ実験から始まったとする第四紀人新世において（層序学会では定義を保留 2024.3）、自然の中で自ら食料を捕食する野生性を失い、仮想現実 AI に思考さえ依存、停止する生活様式は種内での隷従関係、極度な自己家畜化ともいえる。日本における環境教育の在り方を議論し始めたころから、小原秀雄（1978）が指摘していたことである。また、ハラリ（2015）が指摘したホモ・デウスの支配下に、ホモ・サピエンスはネアンデルタール人のように、種として滅びることになるのだろうか。

昨今の、日本の社会で若者たちの学習、教育、学校などを巡る、多くの負の課題は根底的な学習方法論、教育哲学の根底から、問い直して、改善への移行を進めなければ希望が見えてこない。この希望を繋ぐのは環境学習・教育であることを深く議論して、誇りを持ち、人新世を生き物の文明へと移行するように実践、先導し、学問の深化と、実践の普及、子供や人々の幸せを、環境学習により、保障することにある。

参考：kibi20kijin@yahoo.co.jp 木俣美樹男 2021 増補改訂、『環境学習原論—人世の核心』 <https://www.milletimplic.net/ethnobotany/pelnewfinal.pdf>